

ライン川紀行 「ローレライ」の伝説を偲びつつ

酷暑の続いた6月から本格的な夏に入りました。こんな時は少しでも涼しい紙面をと、世界文学紀行で12年前の夏にドイツを訪問した際に訪れたライン川紀行に少し手を加えてお届けすることにしました。

.....

ライン川の水面は白緑（しろみどり）色だった。川辺の新緑を映すかのように、川底から湧き上がった水は緑色に濁っていた。“ゆったりと流れるライン”を想像していたが、予想以上の水量と速い水の流れ。その流れに乗ってクルーズ船はリュエデスハイムから下流のローレライロックへ航行を続けていった。



スイスのアルプスに源を発し、フランスの一部をかすめ、ドイツを南から北へ縦断、オランダを横断し北海へ注ぐ。全長1,233キロ。

うちドイツ国内は698キロ。そのほんの一部の区間ながら、クルーズはライン川の特徴ある景観を満喫できる。近辺に古城が集中してあるからである。川の両側の山の中腹には、あちこちに大小異なる城がそびえ、今は遺跡として中世の面影を留めている。

なぜこの一帯に城が築かれたのか。理由は地の利を生かした戦略上の意味があったことと、川を行き来する船から通行税を取るために、領主たちがこぞって城を建てたため、いわば城は税関の役割を果たしていたのだ、という。



この日、3階建てのクルーズ船にはちょうど100人ほどの観光客が乗っていた。2時間余りの乗船。移りゆく兩岸の光景がよく見えるように、乗客の半分以上が3階（甲板）に出ている。3日前まではこのライン川一帯も雨だったようだが、今は太陽が出ていて直射日光がきつい。甲板上は摂氏30度近く。それでも湿度が低いので汗をかくというほどではない。上半身裸になって日光浴をしている

北欧からの船客。私はときどき自分の位置を移しながら、2台のカメラで移りゆく兩岸の光景をレンズに収め続けた。

ライン川に沿って道路もあり、列車も走っている。6月の第一土曜日。乗船地のリュエデスハイム近辺では、200人近くのオートバイマニアが爆音をとどろかせて“パレード”していた。見たところ、50代から60代の“バイク親父”である。着衣もそれぞれが恰好を決め、500ccとか750ccといった大型にまたがっている。予期せぬハプニングだったが、彼らとの会話もなかなか愉快で面白かった。



乗船して川を下ること1時間余り。流れの川幅が急に狭くなり、左に急カーブ、そしてまた右に回った。右手の大きな岩山・ローレイロックを半円の形で巡るように航行していく。一帯の流れは速く水深もありそうだ。かつては航行中の多くの船が事故を起こした場所だという。と、船内の案内放送が5ヵ国語（独、英、仏、西、日）であった。

——「ローレイ」というのは、この高さ130mほどの岩山を表すと同時に、この岩の妖精の一種でもあり、ドイツの伝承に由来する多くの伝説群にしばしば結びつけられる。伝わっている物語にはいくつかのタイプがあるようだが、共通するモチーフとしては、ローレイとは不実な恋人に絶望してライン川に身を投げた乙女であり、水の精となった彼女の声は漁師を誘惑し、船は川の渦の中に飲み込まれてしまったのだ、という。

説明が終わると懐かしい「ローレイ」の曲が流れ始めた。

なじかは知らねど 心わびて
昔の伝説(つたえ)は そぞろ身にしむ
寥(さび)しく暮れゆく ラインの流(ながれ)
入日(いりひ)に山々 あかく栄(は)ゆる

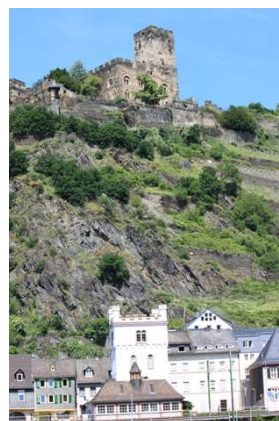
美(うるわ)し少女(おとめ)の 巖頭(いわお)に立ちて
黄金(こがね)の櫛(くし)とり 髪(かみ)のみだれを
梳(と)きつつ口吟(くちずさ)ぶ 歌(うた)の聲(こゑ)の
神怪(くすし)き魔力(ちから)に 魂(たま)もまよう

こぎゆく舟(ふね)びと 歌(うた)に憧(あこが)れ
岩根(いわね)も見(み)為(な)ら ず 仰(あ)げばやがて
浪(なみ)間に沈(しず)むる ひとも舟(ふね)も
神怪(くすし)き魔(ま)歌(うた) (まがうた) 謡(うた)うローレイ
(近藤朔風訳詞)



小学校の6年か中学校の音楽の時間に習った歌だ。曲は美しく自分もときどき口ずさんだこともある。ただ、歌の意味や背景について授業で説明はなかったので、こんな伝説があるとは知らなかった。今あらためて歌の背景を知ってみると、歌詞で綴られている情景がそのまま眼前の情景とつながって感慨深かった。

岬々とした岩山が川に向かって突き出ている。渦は巻



かないまでも水の流れは速い。伝説もさもありなんと思われてくる。この乙女伝説が歴史的にもあった事実なのか創造なのかはわからない。でも「ローレライ」が世界中の人々に口ずさまれている背景には、曲の美しさもさることながら、こんなロマンを誘う伝説が力にもなっているのだろう。

文学の世界でも、作品の舞台に取り上げられたことによって、あらためてその地が見直され、やがて観光の名所となっているケースも多々ある。人間は心に想像と創造の世界を持つことも大切なのだ。“名曲の舞台の旅”は心に爽やかな充足感をもたらしてくれた。

岩山の頂上には旗が2本、風にたなびいていた。ラインを上下する船はここを通るたびに、いつもこのローレライ伝説を心に浮かべるのだろうか。

